

茨城県鬼怒川堤防決壊からの教訓

大阪府安威川（あいがわ）の治水を考える流域連絡会 畑中孝雄

今回の鬼怒川堤防決壊は全国の運動の再構築の必要性和緊急性を問い直す事となりました。

大阪府安威川（あいがわ）の場合も、今本博健さんが「ハイブリッド堤防（土とコンクリート又は鋼矢板を組み合わせた複合強化堤防）」を提案してきました。また2010年の大阪府河川整備委員会で、宮本博司さんは安威川治水手法についての意見書として、「様々な規模の洪水時にどのような危険性があるのかをきっちりと示したうえで、住民の命を守ることを最優先に、従来のダムで貯め、残りの洪水を川に押し込めるという治水手法から、土地利用や家屋の建て方まで含め流域全体で洪水を凌ぐという新たな治水方策への転換を図るという基本的考え方で新たな河川整備計画を策定しようとしてきたにも関わらず、『全川にわたって氾濫が生じるため困難』、『現時点では困難』、『手法が確立されていない』等の表現で、新たな対策手法を門前払いし、あるいは『今後検討をすすめる』として実質的に今回の整備計画に位置付けようとしなかったのでは、まったく従来の『ダムで貯め、川に押し込める』治水手法を踏襲するしかありえない。住民の命を守るために、新たな方策も含めて、何ができるのかということを実地の状況を確認しながらきめ細かに検討すべきである」と述べ、このような観点から提示された手法について以下の意見を述べておられます。「①耐越水堤防『現状では、技術的に困難』な根拠が以下のような点を踏まえて示されていないため、（治水方策）選定手法から外す理由が不明。高さ1mの堤防でも、越水に対して破壊しない構造にすることはできないのか？『技術的に困難』とは何m以上の堤防を対象としているのか？遊水地の越流堤は耐越水堤防ではないのか？極端に言えば、堤防をコンクリートで置き換えれば、重力式ダムが越水しても破壊しないと同様に、ある程度の越水に耐えられることは明快である。②決壊しづらい堤防『堤防満杯規模の洪水時を対象にした安全性の照査が必要』とあるが、計画高水位においてどのような安全性の照査を行っているのかを示し、計画高水位以上の水位に対して同様の照査を行った結果を示したうえで、さらにどのような照査が必要であるかが示されていないため、（治水方策）選定手法から外す理由が不明。」と具体的に指摘しました。